

宮城学院女子大学生による子どもの「日常」再生ネットワーク

活動報告 2014

—目次—

- 宮城学院女子大生による子どもの「日常」再生ネットワーク・・・1
- 2014 年度の活動
 - 1. 石巻市立大原小学校 子ども支援・・・4
 - 2. 仙台市立南光台小学校 子ども支援・・・6
 - 3. 小学生のためのサマーカレッジ 2014・・・7
 - 4. にこにこキッズプロジェクト・・・12
 - 5. 亘理りんごプロジェクト・・・14
 - 6. その他の子ども支援活動・・・16



■宮城学院女子大生による子どもの「日常」再生ネットワーク

*宮城学院女子大学の災害復興支援活動

発災から時が経つにつれて、マスメディアにおいて津波被災地の話題を見かけることが減ってきます。3月11日の「記念日」でもない限り、もはや震災の話題はニュースバリューがないのかもしれないかもしれません。被災地への社会的関心は薄らいでおり、世間における被災者支援やボランティア活動の機運も、かつての熱気を失いつつあるのが、現実です。

しかし、世間の関心が薄れたからといって、被災者にとって長く厳しい日々が続く現実が、変わるわけではありません。災害復興ボランティアの真価は、むしろこれから、被災地への着目が薄れ、支援が手薄になっていく今後こそ、あるのではないのでしょうか。私たちは、被災地に近い仙台にある大学として、今後も復興ボランティアの活動を絶やさずに継続していくことを、重要な使命だと考えています。

阪神淡路大震災をはじめとする過去の災害の例をみても、発災から5年、10年という時を経るなかで、災害復興ボランティアの活動を質量ともに縮小させずに継続することは、決して簡単なことではありません。そこで私たちは、逆説的かもしれないですが、「災害復興」や「被災者支援」という枠組みに囚われすぎないことこそが、災害復興ボランティアを長期的に続けるためには必要なのではないかと、考えます。緊急対応期における非日常的な活動として災害復興ボランティアを、復

「3.11」以降に失った「日常」を再生する一助となるべく、尽力したいと考えています。

発災直後は個別に展開していた、学校常駐型の学習補助、炊き出し活動、音楽による慰問、遊び支援などを統合して、各部門が連携した総合的な

興期における日常的な活動へとだんだん移行しつつ、無理なく継続していくことが大切なのではないのでしょうか。もちろん、その理念を実行するのは、容易ではありません。緊急対応期の後、長く緩やかに続く地域復興の過程を通して、地道な支援活動を先細りさせることなく継続するにはどうすればよいのか、宮城学院全体で考え、精一杯取り組んでいきます。

*子ども支援プロジェクト

被災直後とは異なり、かつてのように瓦礫片付けなどへの人手が必要とされていた状況から、被災者の皆さんの生活再建をサポートするための多様で複雑なニーズに応えるフェーズへと、ボランティアの形も移行しています。宮城学院女子大学では、学生たちが一時の盛り上がりにならずに長期継続できる取り組みとして、総合的な子ども支援活動を展開しています。

震災直後には我慢強い「よい子」でいた宮城の子どもたちが、時間の経過に伴って、内在化させていた深刻なストレスを表出し始めています。不安や悲しみ、心的外傷を抱えながらも、多くの子どもたちはそれを言語化できず、SOSを出すのは氷山の一角にすぎません。また津波被災地では、発災から三年が経った今でも、教員たちは多忙を極め、保護者も生活の再建に追われて、時間をかけた丁寧な子どものケアができていない状況にあります。本活動は、そのような事態の打開を目指す、宮城学院女子大学の学生による継続的な子ども支援の試みです。単発的な学習補助や遊び機会の提供にとどまらず、「学び」「遊び」「食」を総合したアプローチにより、被災児童が子どもケアに昇華します。2014年度は、公益財団法人カメイ社会教育振興財団、公益財団法人大和証券福祉財団からの活動助成金をいただき、本学卒業生のネットワークがある県内沿岸部の被災校に、活動を広げてきました。

*MG子ども支援の理念

本活動がめざすところは、以下の三点に集約されます。

①総合性：異常事態への対応よりむしろ、発達の保障を前提とした心地よい「日常」の再生という視点から、子どもの生活に多面的に関与する。具体的には、学び（学習支援や英語活動）、遊び（音楽や表現など）、食（上質な食事の提供）のジャンルで連携してボランティアを展開し、子どもたちとの個別対話を通じて、各自異なる発達課題に応じた生活リズムを作り上げる手助けをする。

②継続性：不安や心的外傷を抱える子どもたちに必要な、上下関係が確立した相手である教員以外の、共感的な「安心できる他者」を確保する。単発的な慰問活動ではなく、メンバーがシフトを組んで学校に常駐する。小さなつぶやきにも耳を傾け、モヤモヤした気持ちを言語化するプロセスに寄り添う「年上の友だち（仲間）」として、子どもの生活に溶け込む。③重層性：激務と責任の重さに疲弊する教員をも併せてサポートする（特に新任や経験の浅い教員の負担を一部分け持つ）。とりわけ、学校も家庭も十分なケアがしづらい、身体的ハンディ・発達上の問題・近親者の喪失などにより心理的な脆弱性を抱えた子どもたちへの、授業内外の時間をできるだけ長く共有する個別対応を、多忙な教員・保護者に代わって行う。

本活動は、「被災者支援」という枠組みに囚われず、被災時から平時へとまたがる長期的な活動ネットワークを確立することで、子どもたちの「日常」を再生し、生活の質を高めていきます。その取り組みを通じて、専門性が低い学生主体のプロジェクトとして実効性を持ちうる、地元学生だからこそ可能な（単発の慰問ではない）、総合的・継続的・重層的なサポートのノウハウを蓄積し、ゆくゆくは災害後の子ども支援一般に応用可能なプログラムへと整理して、被災各地に提案したいと考えています。

東日本大震災で大きな被害を被った地域は、津波の襲来を受けた沿岸域に限っても、青森県から福島県まで、長大な範囲にわたります。残念ながら、その全域において子どもたちへの支援がまんべんなく行き届いているとは、とても言えない現状があります。

2014年2月28日のNHKニュースでは、被災地の子どもたちが置かれた厳しい状況、そして支援をめぐる格差が拡大している実態が、報じられました。

適切なケアを受けられず心理的な傷を抱えたまま自暴自棄になったり、不登校になったりしている子どもがいることや、家庭の経済状況を察して高校進学をあきらめ働く子どもがいることなどが報告され、支援が届いている場合とそうでない場合とで格差が広がっているという声が、相次ぎました。

宮城学院女子大学の子ども支援プロジェクトは、どこか遠くから訪れては去っていく単発型の支援ではなく、「いつもの、普通のこと」として子どもたちに寄り添い続けることを、第一の基盤と心がけて活動に取り組みます。子どもたちの豊かで安定した「日常」を取り戻すために、ささやかであっても活動を途切れさせることなく続けることが、私たちに出来る最大の貢献だと考えています。



*大原小学校 学習支援 活動報告

中村 彩香(食品栄養学科 4年)

2011年3月、東日本大震災が起こりました。宮城県ではたくさんの被害があり、まだまだ復興の途中です。石巻市の牡鹿半島の海沿いにある大原小学校への支援は今年で3年目となります。この学校がある大原浜一帯は、津波によって壊滅的な打撃を受け、高台に建っていた小学校のみが流されずに残りました。それまで大原浜に住んでいた方々は、遠くの仮設住宅での生活を余儀なくされました。被災からもうすぐ4年を迎える今でも、児童の約半数が仮設住宅からバス通学をしています。

この学校は石巻市街と比べて交通の便が良いとは言えず、継続的な支援が受けづらい状況にあります。同じ宮城県にいる私たちだからこそ継続する意味があると考え、震災前の日常生活を取り戻せるよう活動してきました。

今年度も日常的な支援として、昨年度までと同様に平日の学校で子どもたちと一緒に過ごして勉強や遊びのサポートをしました。さらに、イベント型の支援として教頭先生から依頼をいただき、食品栄養学科の丹野久美子先生と音楽科の菊池恭江先生による出張授業を行いました。



こうして毎年の恒例行事のように体験授業が開

けることは、先輩たちの代から支援を継続して通うことで、大原小学校の先生方や子どもたちと信頼関係を築くことができからではないかと、嬉しく思います。



子どもたちの中には学年や性別、性格によって、深く踏み込むことや、対応が困難な子どももいました。私たちは「教員」ではないため、児童の詳しい情報や事情については、子どもたちが自ら話してくれるまで知ることはできません。「この子は、どうしていつも言葉や行動が少し乱暴なのだろう」と思っている、ただただ受け止めることしかできませんでした。それでも、1年、2年……と月日が経つにつれて、子どもたちの表情も変わり、自分のことを話してくれる時間が少しずつ増えてきました。この活動を通して、継続することがどれだけ大切なことか実感しました。

今年度は、食品栄養学科の4年生が中心的に活動してきたため、来年度からの活動を引き継いでくれるよう後輩たちに呼びかけたり、活動の魅力を伝えたりする活動にも力を注ぎました。1年目は本当に支援に行っているのか、迷惑ではないかと不安でもあったのですが、今では大原小学校の子どもたちや先生方から「ぜひ来てください」と言ってもらえる活動になりました。来年度からもぜひ引き継いで支援してほしいと思います。



*大原小学校 食育学習会 活動報告

食品栄養学科4年 木野恭佳・浪岡彩織

11月21日、石巻市立大原小学校にて、食品栄養学科の丹野久美子先生と学生4名で、食育についての学習会を行いました。テーマは「おやつと運動」です。

1、2年生では、巨大すごろくを活用し、体育館に敷かれたマス目に書いてある課題をクリアしてゴールを目指す、ゲーム感覚で学べる授業を行いました。マス目に書かれた課題は、「たいやきを2個食べたので、縄跳びを10回飛ぶ」など、おやつの食べ過ぎに注意することや、余計に食べたら運動をしなければならないことを学ぶことのできる内容です。大学生とペアになって自分が駒となり行いましたが、子どもたちが楽しみながら体を動かして学ぶ様子が印象的でした。



3～6年生では、おやつにはエネルギーが多く含まれていることを実感で学ぶ授業をしました。内容は、自分たちが選んだおやつと消費エネルギーが同等になるよう計算し、なわとびやバドミントンなど好きな運動を複数組み合わせ、時間内に行うものです。はじめは難なく運動をこなしていた子どもたちでしたが、後半になるにつれへトへトになっていました。「こんなにも運動をしないと、食べたおやつは消費できない」ことを感じてもらったのではないかと思います。

子どもたちが笑顔で活動するのを見ることができ、とても嬉しく思いました。また、常に元気に走り回るなど、もっと体を動かしたい様子も見られたので、またぜひ訪問して、子どもたちがのびのびと健康的に生活できる支援をしていきたいと思えます。



* 南光台小学校 学習支援 活動報告

古内 晴菜(食品栄養学科 3年)

南光台小学校へのボランティアを始めてから、1年になります。「母校のために、何かしたい。」ぼんやりとした理由で始めたボランティアは、自分の役割を問う時間でした。かつて、どっしりと構え、私たちを見守っていた学び舎がもう無い。本当にここは母校かと疑う気持ちで校門をくぐったことを覚えています。薄い壁のプレハブの建物は、上の階の足音が聞こえ、児童の声の反響だけで揺れるような頼りなさを感じさせました。

主な活動は、学習支援と児童との触れ合いでした。課題に丸を付けて回ったり、わからない箇所を個別で教えたりしました。先生からお仕事を頼まれたときは、役に立てることが嬉しく、張り切っていました。しかし、児童から頼られたとき、自分の判断で答えて良いものかわからず、困ってしまいました。体育の時間、体調が悪いと訴えた女の子をすぐに保健室に連れて行きました。先生に相談せず、授業を抜け出させたことで、後で注意を受けました。頼られたとき、全力で応えたい。しかし実際は、空回りしているばかりで役に立っているか不安でした。頼りないのは自分自身だったと反省しました。



そこからは、授業において先生は児童に何を教えたいのか、児童は何を求めているのか、考えるようになりました。大学の授業の合間に、たまにしか訪れない私が、その場に居ることによって変わることとはとても小さなことでした。児童の話し相手になる、一緒に給食を食べる、届かない窓を開けてあげる、そんな少しの働きかけしかできませんが、1つ1つの触れ合いを大切にしようと思いました。1年が経とうとしたとき、先生が「よく気がつき、児童をよく見ることができる人」と評価してくださいました。

役に立っているか、何をすべきか、問い続けるばかりでまだ答えが出せません。しかし、児童と触れ合った時間は確かなものでした。工事中の新しい校舎が、形をはっきりさせてゆく様子を眺めながら、児童と過ごす時間は私の中で特別な時間となりました。



*サマーカレッジ 2014 活動報告

加藤 はるか（児童教育学科 3年）

サマーカレッジの活動は今年で4年目となり、去年に引き続き学生が主体となって計画し、実行しました。前学期末の忙しい時期と重なっているため、大変なこともありましたが、小学生に2日間を楽しんでもらうために遊歩道、表現講座、講座、遊び、食事、記録のそれぞれの係が時間をかけて準備しました。

私は今回が2回目の参加となりました。昨年は講座係として参加しましたが、今年は表現講座係として参加しました。わからないことが多く不安だらけでしたが、同じ表現講座係のメンバーと助け合い、協力しながら準備を進めてきました。



今回の表現講座には東北文教大学の河合規仁先生をお招きしました。内容は、葉っぱや木の実を拾いながら遊歩道を散策し、森で感じた様々なイメージを拾ってきたものや絵の具などを使ってうちわに表すというものです。事前の準備では、使用する道具をそろえ、そして試作を繰り返しました。試作をすることで、どういった点に気を付けて子どもに声がけするべきか、作業しやすい環境作りに必要なものは何かなど様々な観点から考えることができました。また、当日は係の学生だけでなく、他の係の学生にも表現講座を手伝っても

らうため、作業の流れやポイントをまとめ、全員で共有できるように工夫しました。活動の際に子どもとどのように関わってほしいか、どのような声がけをしてほしいかなど、河合先生の活動の意図に沿って、想像しながら考えることはとても大変でしたが、良い活動となるようみんなで頑張りました。

その甲斐もあり、当日子どもたちは熱心にそして楽しそうにうちわ作りを行っていて、その様子を見て本当に嬉しい気持ちになりました。自分の感じたことをオリジナルな方法で表現している姿がとても印象的で、個性のある素晴らしい作品が出来上がりました。そして最後に、河合先生が子ども一人一人に対し、その作品にコメントしてくださいました。先生が子どもに対して真剣に向き合っている姿勢は、将来教育関係の仕事に就きたいと考えている私にとって、とても勉強になりました。

サマーカレッジは子どもたちが学ぶ場ですが、大学生の私たちも子どもたちとの活動から多くの事を学ぶことができます。今回のサマーカレッジでは、元気あふれる子どもの姿、子どもの発想や表現の豊かさを感じ取ることができました。充実した2日間を送ることができ、とても良い思い出となりました。



*サマーカレッジ 2014 活動報告

遠藤 香菜 (児童教育学科 3年)

2回目の参加となる今回、私は講座系のリーダーとしてサマーカレッジに参加しました。そのため、リーダーとして係全体をまとめることができるのか、先生方や他の係と上手に連携ができるのかなど不安がたくさんありました。しかし、メンバーの協力や先生方から頂いたアドバイスのもとに試行錯誤を繰り返しながら準備を進め、当日は私自身、サマーカレッジを楽しむことができました。

講座系の活動は、河北新報のかほびよんこども新聞に載せる講座紹介の記事作成から始まりました。記事の作成にあたって、何度も先生方にインタビューしたり、記事の内容を考えたりした経験は、私にとって貴重な体験となりました。新聞を通して初めてサマーカレッジを知る子どもだけでなく、何度も参加してくれている子どもにも楽しさや面白さが伝わってくれたら良いなという思いで取り組みました。一番難しかったのは、先生方が子どもに伝えたいことを、分かりやすく文章にまとめることです。新聞を読むのは小学生です。専門的な言葉を使っても分からないので、小学生が読んでも分かる言葉や文で表現することに苦労しました。準備は大変でしたが、新聞を見て参加してくれた子どもたちもいて、記事作りに関わる事ができて良かったと思いました。



サマーカレッジ当日は、友野聡子先生の講座を担当しました。友野先生の講座は今年が初で、目の錯覚を用いて「トリックアート作り」をしました。子どもに興味を持ってもらうためにはどうしたらよいか、どの程度子どもに作ってもらうかなど様々なことを考え、授業や実習で学んだことを生かしながら、準備を進めることができました。

当日、子どもたちの夢中で作っている姿、友達と協力して取り組んでいる様子を見て、私もいつのまにか夢中で活動に参加していました。係の仕事を通して、子どもと関わる上でそれまで気づかなかった改善点も分かり、充実した活動を行うことができました。

準備から当日まで全てにたくさんの思い出があります。それらを通して、学んだことをこれからの大学生活や将来に役立て、これからもボランティア活動や勉学に励んでいきたいと思えます。サマーカレッジのメンバー、MG-LACの教職員の方々のおかげで、楽しい2日間を過ごすことができました。心より感謝しております。ありがとうございました。



*サマーカレッジ 2014 活動報告

竹島 愛葉（食品栄養学科 2年）

私は食事係として、このサマーカレッジに参加しました。食事係の主な仕事は、食事・おやつの献立・配膳、森のレストランの装飾です。

食事の献立は、試作を2回行った結果、1日目のメニューはごはん・2種類カレー・コーンスープとなりました。カレーは残飯が少なく、添えた野菜も苦手だと言いながらも子どもたちが食べてくれたということを耳にして嬉しく思いました。2日目のメニューはライスサラダ・ハニーローストポーク・かぼちゃサラダ・枝豆の冷製スープです。この日は全体的に残飯が多かったです。理由は、ブロッコリーの味付けが薄かったことと、ご飯とお肉の量が多かったためと考えられます。メンバー全員が子供の嗜好と食べられる量についてもっと考慮すべきと反省しました。



おやつは、1日目はパンナコッタ（乳製品アレルギーの子は豆乳のパンナコッタを提供）、2日目は抹茶・ココア・プレーンの三色スノーボウル（小麦粉アレルギーの子は全粒粉で作製、見分けしやすいように3つともプレーン）を提供しました。今年は調理実習室が使用できなかったため、おやつも生協さんに調理していただきました。そのため、昼食の片付けを終えた後に、少しですが子どもたちとサマーカレッジのプログラムに参加することができました。

全体の装飾は、異物混入を防ぎたいとの要望もあったことから、できるだけ虫が入らぬよう人工物も使用して森を作ろうと考えました。また七夕まつりが近かったため、私たちは「森のレストランでの七夕」をコンセプトに装飾物を作成しました。本番前日に先生方からのご指導もいただき、本物の森に近い雰囲気のある装飾をすることができました。今回は直前のやり直しなどもあったため、装飾を準備する前の段階で一度先生と店長さんに装飾案を提出し、目を通していただくべきでした。そして今年も竹のアーチを作りましたが、去年の半分以下の本数での挑戦でした。そのため、光和の職員さんからいただいた葉つきの枝をアーチに加えて去年のものに見劣りしないようにみんなで試行錯誤しながら設置しました。光和の職員さんには寮の裏に連れて行ってもらったり、竹や枝を切ってもらったりして大変助けいただきました。



食事係は1日中ピエリスにいたため、お昼とおやつの時間しかサマーカレッジの全体を見ることができなかったのですが、班についていたメンバーのみんなは声掛けがとても上手で、おかげさまで子どもたちがたくさん食べてくれていました。私たちは、子どもたちがなにを食べたいか、なにを提供すれば喜んでもらえるかを一番に考えながら話し合いを進めました。ですが、アレルギーを考慮しなければいけないことやピエリスで提供出来る料理の限界を考慮しなければならなかったことが大変でした。また、試作をしてもおいしいものができずに何度も心が折れかけました。ですが、子どもたちの笑顔がみたいという一心で案を出し合い、生協の店長さんにぎりぎりまで待っていただいて提供にこぎつけたのです。サマーカレッジ当日のお昼ごはんとおやつの時間はとても幸せな時間でした。子どもたちが「おいしい！」と言ってわたしたちが考えたごはんを笑顔で食べてくれているのです。完食する子やおかわりまでしてくれる子もいて、みんなを抱きしめたくまりました。



食事係は他の係より、たくさんの人と接する機会をいただきました。協力していただいた方々が1人でも欠けていたら、サマーカレッジの食事は成り立っていません。子どもたちの笑顔は私たちの原動力になり、光和の職員さん、生協店長さん等の助けは私たちの機動力となりました。活動期間は反省ばかりの毎日でしたが、私たちは全力で

裏方の仕事をやりきりました。11人全員で最後まで頑張れたことに誇りを持っています。メンバーのみんなとサマーカレッジに関わる全てのひとには感謝を伝えきれません。笑顔あふれる活動になって本当に良かったです。ありがとうございました。



*サマーカレッジ 2014 活動報告

川村 百恵 (児童教育学科 2年)

私は今回、初めてサマーカレッジに参加し、遊歩道係として活動しました。遊歩道散策は、午後からの表現講座に大きく関わるため、ただ歩くのではなく、声掛けやミッション（クイズ）などで子どもたちが何かに気付いたり、疑問を深めたり、感じたりできる意味のある散策にしたいと思いました。そのため何度もみんなで遊歩道を歩きました。注意深くしっかりと自然に触れることで普段は何気なく見逃してしまうような小さなことに気が付きました。太陽の光や影、風や水の暖かさ、音・虫の鳴き声や形、植物の根や葉、土の色やさわり心地など様々な視点で観察することでたくさんの気づきがありました。これらを子どもたちにもぜひ感じて欲しいと考え、先輩方にアドバイスをいただきながらサポートとして参加する大学生が声掛けしやすいようプリントを作成し伝えました。いかにわかりやすく、簡潔に表現するかに力を注ぎました。またミッションなどのパネル（看板）も手分けしてみんなで作成しました。



サマーカレッジ当日は気温が高かったこともあり体調管理などの不安がありました。大きなけがやアクシデントもなく、準備したミッションを子どもたちが喜んで解いていたり、何かを見つけ目をきらきらさせながら見せてくれたりとたくさ

んの素敵な笑顔を見ることができました。

子どもたちは私たちが気付かなかったことや、また深く考えたことの無かったことに気づき、疑問に思っていました。たった一度散策をしただけでたくさんことに気付く子どもたちに驚くと同時に、声掛けなど子どもたちが気付くための機会を用意することの大切さも感じました。

準備は大変でしたが、当日子どもたちが笑顔で、「楽しかったよ」「また来たいな」と言ってくれたことがとてもうれしかったです。今回のこの経験は私にとって本当に貴重なものとなりました。



にこにこキッズプロジェクトは 2013 年 9 月に発足し、東北学院大学と連携で、主に被災地の子ども達のための遊びをサポートする活動を行っています。また、プロジェクトの企画・運営・実施までの一連の流れを学生が全て担っています。発足当時は岩沼南児童館のみが主な活動場所でしたが、2014 年度からは他団体とも関わりを持つことができ、「冒険あそび場」、「コヨット」の 2 つの活動が加わりました。

*活動報告（岩沼南児童館）

加藤明日香（国際文化学科 2 年）

岩沼南児童館での遊び支援では、主に放課後に集まってくる子ども達との遊びや、16 時 30 分からの登録児童全体での遊びの企画を行っています。自由に遊ぶ際には、鬼ごっこやサッカー、バレーボール、折り紙などを一緒に行います。16 時 30 分からの企画では、事前にゲーム（遊び）を参加者で企画し、当日は学生が主体となってゲームを進めます。また、長期休業中は積極的に児童館に訪問し、小さいながらもクリスマスイベントや工作イベントの企画も行うことが出来ました。

私は、教師を目指していて、また子ども達と関わるボランティア活動に挑戦したいという思いから、このプロジェクトに参加しました。ほぼ発足当時から参加していたので、最近活動が活発になり様々な試みを実施できるようになり、とても嬉しく思います。特に児童館での活動に関しては、継続して訪問することによって、子ども達との関係を築くことができ、学生が訪問した際に子どもたちから名前を呼んでくれるようになりました。また、継続した訪問によって、私たち学生も子どもとの付き合い方やどんな子ども達がいるのかということを少しずつ理解してきました。そのため、企画の際は、どのような遊びであれば全員で楽し

めるのか、どのように進めていくべきなのかということも見えてきたように思います。

さらに、この活動を通して私自身の成長も感じています。このプロジェクトでは、企画・運営・実施を学生が全て行っているため、それぞれの学生が積極的に参加し意見していかなければ成り立たないプロジェクトです。私は最初の頃はあまり意見することが出来ませんでした。ミーティングや活動を通して、自分がやりたいことを積極的に提案し、意見を言うことが出来るようになりました。また、その提案を実行に移し、成功出来たことは自信につながりました。その例が工作イベントです。

工作イベントは、私が関わっている他のボランティア活動での経験を児童館でも生かしたいと思い、児童館の職員さんと話したことがきっかけでした。もちろん反省点はありますが、イベントの宣伝や子ども達ができること・できないことを考慮した準備や実際の活動などによって、物事を企画・実行する力がつきました。また、工作活動は活動目標の 1 つである「学びのきっかけ」作りになるということにも気づきました。

2015 年度は、長期休業中の企画にも力を入れて、他大学と協力しながら、子ども達との関係性を深め、「学びのきっかけ」作りに繋がるような遊びのサポートを継続して行っていきたいと思います。



*活動報告（冒険あそび場）

箱石夏生（生活文化デザイン学科2年）

冒険あそび場とは、主に岩沼にある仮設住宅の近くの公園で NPO 法人冒険あそび場せんだい・みやぎネットワークの方々と一緒に子どもたちとふれあい、サポートをする活動です。ここでの活動は子どもたちにのびのびと遊ばせることを基本理念としているため、「～をしてはいけない」というルールは特にありません。子どもたちにあそび場にある様々な道具だけでなく、木や草、水、土など、ありとあらゆるものを使った遊びを自由に挑戦できる場を提供しています。

私は子どもが好きでこのボランティアへの参加を決意したため、将来直接子どもと関わる職に就くわけではなく、最初、子どもへの注意は苦手でした。しかしこの冒険あそび場では難しいルールがないため、子どもたちの無限大の探究心からさまざまな遊びが展開され、日々新たな発見があり、子どもたちと一緒に学ぶことができました。なにより、好奇心でいきいきとした子どもの表情を見ると幸せな気持ちになりました。危ないことを危ないと知らずに成長していくことは恐ろしいことです。遊ぶ環境が制限されていないこの冒険あそび場は、「やりたい」と思ったことを身をもって体験できる貴重な活動であると思います。このいわば、「生きる力」を育む場所である冒険あそび場で私自身もこれからも学んでいきたいと思っています。



*活動報告（コヨット）

箱石夏生（生活文化デザイン学科2年）

コヨットとは、宮城生協と福島生協が共同で行っているプロジェクトの一環であり、原発事故の影響により、満足に外で遊ぶことができない子どもたちとその親御さんを蔵王の遠刈田温泉に招き、子どもたちには外で遊ぶ機会を、親御さんには子育てから離れ、のんびり過ごす時間を提供しています。また、一時間程度、自分たち学生が企画した遊びをする時間が設けられています。

この活動では、子どもたち同士も初対面であるので、上手に打ち解けられるようサポートを心がけました。初めはぎこちなかったものの遊びを通じて次第に距離が近くなっていくのを実感した時、とても嬉しく思いました。企画の時間では、学生が計画した遊びを実行していますが、そこで学んだことがいくつもありました。それは事前の計画を、参加した学生メンバー全員が理解しているとサポートに入りやすいということです。また、時に臨機応変な対応を求められます。起こり得るすべてのことを想定しますが、対策できることには限りがあるので、活動を通して見えてきた課題や反省点、良かった点を活動報告書で共有し、次につながられるようにしました。幼児から小学校高学年までの幅広い年齢の子どもたちにより楽しんでもらえる企画を目指して、引き続き活動を深めて行きたいと思っています。



* 亘理りんごプロジェクト活動報告

大学院健康栄養学研究科 健康栄養学 1 年
栗野志歩・深澤律子

りんごプロジェクトは、今年度で 3 年目の活動となりました。これまで亘理・荒浜保育所の先生方、本学の院生・学生、教員で築き上げてきた実践を引き継いで活動をしました。私たちは、レッジョ・エミリアのプロジェクト型保育について学びながら、カリキュラムをデザインしていきました。カリキュラムをデザインしていく中で、子どもたちの可能性や創造性を引き出すためには、どのように子どもたちに寄り添っていけば良いのか、何度も話し合いを重ねました。より良いカリキュラムを創り上げていこうと意見がぶつかることもありましたが、子どもたちの笑顔を思い浮かべながら試行錯誤する日々は、私たちにとって貴重な経験となりました。

本年度は、「“はてな”の木を創ろう」「りんご狩りをしよう」「りんごの実を熟させよう」「りんごの絵を描こう」「みんなで描いたりんごの絵を鑑賞しよう」の全 5 回で進めていきました。はじめに、りんごの“はてな”探しをキーワードに、色んな産地・種類のりんごを見て触って香りを嗅いで、りんごへの関心を深めていきました。りんごを観察しながら子どもたちは、「どうして、赤いりんごと黄色いりんごがあるの?」「りんごの頭とおしりはなぜへこんでいるの?」「りんごは、どうしてやわらかいものとかたいものがあるの?」など、次々とたくさんの“はてな”を見つけました。私たちは、子どもたちの感性や創造性の豊さを目の当たりにし圧倒されました。

りんご狩りでは、りんご博士に話を聞いて“はてな”を解決したり、自分たちが暮らす地域のりんごを自分たちの手で収穫し観察したりすることによって、りんごへの興味・関心をさらに深めま

した。みんなで一緒に収穫したりんごを見て、切って、食べていく中で「どうして、りんごには甘いところとすっぱいところがあるの?」など、さらなる興味を引き出すことへと繋がりました。しかし、私たちはそれに対してその場で答えを教えてしまったため、子どもたちの気づきを生かせませんでした。そのため、りんごの実を熟させる活動でも、ひとつひとつの“はてな”を解決しようとするあまり、子どもたちが見つけた新たな“はてな”について学びを深めていくことができませんでした。りんご狩りでの体験や子どもたちの新たな気づきを次の活動へと生かすことができなかったことは今後の課題であると考えます。



りんご園で収穫してきたりんごは、臨床美術の手法を使って、子どもたちが“私だけのりんご”として表現していきました。普段は、友達と同じような絵を描き、同じような色を選んでいたりんごの色のイメージでオイルパステルを選んだり、自分のりんごの絵に合う色画用紙を選んだり、ひとりひとりが異なる“私だけのりんご”を完成させました。また、互いに作品を鑑賞して、さらに褒められることで、子どもたちは、自分は褒められ、みんなから認められているのだという嬉しそうな表情をしていました。

今年度のプロジェクトでは、私たち自身、プロ

プロジェクトへの参加が初めてであったこともあり、緊張をして淡々と進めてしまったり、一度にたくさんのお話を子どもたちに伝えてしまったり、子どもに寄り添うということの難しさを改めて感じました。しかし、プロジェクトが進むごとに子どもたちと活動する喜びを感じ、私たち自身も子どもたちと一緒に楽しむことができました。今年度の経験を来年度の活動へと繋げていけるよう、来年度は、プロジェクトを行う前に5歳児の心身の発達を理解するため子どもたちの普段の様子を観察したり、一緒に遊んだり、子どもたちと一つになれるような活動を取り入れたいと考えています。



また、今回は、ドキュメンテーションに重点を置いて、子どもたちの発言や行動を記録し、その記録をもとに話し合いをしながらカリキュラムをデザインしようと試行錯誤を重ねました。しかし、子どもたちの学びや気づきを次回の活動へつなげたり、参加する全員で活動内容を振り返って共有したりすることができませんでした。このことは、日程等の問題もありますが、プロジェクトの目的やレッジ・エミリアの教育概念を参加者全員で共通理解していなかったことが原因の一つであると考えます。私たちは、今回の活動を通して、りんごプロジェクトの目的や概念、ドキュメンテーションの大切さを深く認識しました。このプロジェクトの最終的な目的は、“私だけのりんご”から“みんなのりんご”へと広げていき、みんなでひとつの大きなりんごの木を創ることでした。しか

し、それをプロジェクトに関わる全員で共通理解できていなかったため、うまく繋げられませんでした。今後の課題としては、「プロジェクトの目的や概念を参加者全員で共通理解すること」「ドキュメンテーションを行い、次の活動に向けて話し合いながらカリキュラムを作成していくこと」「子どもたちの学びや気づきを次の活動に繋げること」の3点が挙げられます。

来年度は、今年度のドキュメンテーションをしっかり引き継ぎ、さらに子どもたちに寄り添うことができるよう、より一層保育士の先生方と、院生・学生とで十分に検討を重ねたカリキュラムを共に作り上げていきたいです。



◆しごと旅

「しごと旅」プロジェクトでは、体験型の職業体験ツアーの企画、運営、催行を行っています。子どもたちが本物の仕事と職場に触れ、「働くこと」について考えるきっかけを提供したいとの思いで発足しました。2014年度は、鳴子こけし工房、女川タイル工房、演奏会運営にてツアーを催行しました。子どもたちが自分の将来について楽しく具体的に考える経験機会を与えると同時に、企画する大学生にとっても自らのキャリアを考える機会となっています。



◆算数教具開発プロジェクト

「誰でも簡単に作れて、誰でも簡単に使える教具」をコンセプトに、児童教育学科の学生が中心となって活動しています。「教具」を工夫することで、児童の興味や関心を引きつけ、理解度を高めたいねらいがあります。今年度は月1回の検討会、オープンキャンパスでの活動紹介、ラジオ出演、さらには仙台市内の小中学校で、開発した教具を子どもたちと一緒に実践する機会もいただきました。「算数って面白い」と子どもたちが思うきっかけづくりとなれるよう、今後さらに充実した活動を

行っていきます。



◆So@t a you (スポット ア ユー)

スポーツ栄養へ興味・関心がある食品栄養学科の有志学生が集まって発足した活動です。スポーツ栄養について学び、学んだ知識を活用して選手や選手の保護者に対して栄養サポートを行うことを目的としています。また、自分達自身のスポーツ栄養に関する知識を深め、栄養指導や栄養支援の経験値を高めることも目標としています。栄養サポートを活動の中心とするテニス班・バスケ班、勉強会や講演会の企画・運営を行う企画班に分かれており、外部からの栄養支援の依頼にも応えた活動を行っています。



◆虹色のシンフォニー

宮城県内で音楽を学んでいる子どもたちをソリストとして招いた演奏会「虹色のシンフォニー」の開催と、普段音楽に触れる機会の少ない方々へ音楽を届ける慰問演奏の2つを中心に活動しています。演奏会「虹色のシンフォニー」では200名を超える沢山のお客様を迎えるなど、地域の方々、ソリストの子どもたち、音楽家の先生方と交流をもつことができ、改めて「音楽の力」を再認識することができました。もっと様々なニーズにお応えできるよう、演奏技術やプログラミング能力の底上げも必要だと感じています。慰問演奏活動では、特別支援学校や、高齢者施設、病院等を中心に、様々な場所で演奏機会をいただきました。



◆Heartful Sweets (ハートフルスイーツ)

毎月第3土曜日にドナルド・マクドナルドハウス 仙台（宮城県立こども病院に入院する患者の家族のための宿泊施設）にて、利用者の方へ手作りお菓子とカードの提供を主体に活動しています。親御さんからは「家では普段お菓子作りをしないので、これをきっかけに家でも子供たちと一緒に作ってみようと思います。」等という声も聞くことができ、活動のやりがいとなっています。6月には、名取にある特別養護老人ホームうらやすでも喫茶ボランティアを行い、次年度以降も継続して活動させていただく予定です。



